

井上円了の社会教育思想

著者	北田 耕也
雑誌名	井上円了研究
巻	3
ページ	3-17
発行年	1985-03-16
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00006763/



井上円了の社会教育思想

——研究の一視点——

北 田 耕 也

—

本日は「井上円了の社会教育思想——研究の一視点——」という題でご報告することになりました。ここで一視点と云っておりますのは、いわゆる研究方法を含めて、という事です。そういうふうにご理解いただきたいと思います。

いったいわが国では、社会教育は、どういうものとしてとらえられたのか、つまりわが国社会教育思想のいわば元発想ですね。一番大本にある発想というものを、ひとつおさえておくということ。それから二番目に、それがどういうふうな、具体的に展開されたかという戦前社会教育の特徴というものを、おさえてみるということ。その二つを中心にして、それとの比較によって、円了の社会教育のとらえ方、その実践にかかわる特徴をひきだしてみたいと思います。

今日の報告は、本当のデッサンにすぎません。別に自分の未熟を隠すために申しあげているわけではなくて、本当にまだ十分に考えた方法でもありませんし、実際、私が読みましたのは、「仏教活論序論」の他に、いただきました

三冊の資料の中の関連がありそうだと思われる何編かの論文を読んだにすぎません。僅かの物で断定することは、大変危険ですし、僭越だということはよくわかっております。ですから、以下に聞いていただきますことは、本当に一つの仮説的な展開にすぎません。したがって、後で、以上申しあげました方法と、そこから引き出される幾つかの仮説的な意見について、どうか充分にご批判いただきたいと思います。

最初にわが国社会教育思想の元発想と申しあげましたけれども、そこから入りたいと思います。わが国で社会教育という題をもつ本で一番早く出た物は、一八九二年、明治二五年に出た山名次郎という人の「社会教育論」、今のところこれが一番古い物ではないかといわれております。山名はここで社会教育を、どういうふうにとらえていたか。簡単に申しあげますと、やがてわが国にも労働者階級が出現してくるであろう。労働運動、社会運動というものが、高まってくるに違いないと、予想した上で、事態を未然に防ぐための貧民階級に対する教育対策を、社会教育と名付けたわけです。ご承知のように、日本の労働組合運動は、一八九七年、明治三〇年に、高野房太郎、片山潜、彼等が中心となつて労働組合期成会を結成したその時から始まったといわれておりますけれど、その五年前に、山名が今申しあげたような発想にたつ社会教育論を発表しているわけです。一部その中の言葉を引いておきますと、「率いて党をなし、甚だしきものは、或いは発して社会党となり、共産党となつて」と、こういうふう将来を予見して心配しているわけです。従つて「これを未だ発せざるに防ぎ」……そうなつてからでは手をやくので、そうならない前に手をうたなければならぬ。「学校に昇らずして教育の徳沢に浴せしむるの道」を講じておかなければならぬ。学校教育以外でも色々な方法を使って、これを未だ発せざるを防がなければならぬ、そういう教育が社会教育だと山名は名付けたわけです。ただこれは必ずしも山名個人の独自の発想というものではないのではないか。

山名は慶応義塾の出身なんですけれども、福沢諭吉も、この山名の本が出る一年ほど前に、山名が言ったのと同じ

ようなことを言っております。福沢という人はご承知のとおり、生涯の時期時期によって、発言のニュアンスがかなり違った人です。たとえば教育に関していえば、福沢はその初期には、文明を、衆心発達というふうにとらえるわけです。文明というのは、一人一人の人間の心が開かれていくという、そういう事を尺度として測られるべきものであるとして、衆心発達という独自の言葉も使いますし、また、有名な「一身独立して一国独立す」というふうにも唱えたわけです。彼は、その社会が持っている所謂形成力に注目しておりました。ですから、学校教育はもちろん大事なんだけれども、社会の形成力というものが、大きな意味をもつという事を早くから言っていたわけです。たとえば全国に充満する空気の教育、こういうものが大事だと言っておりますし、その国の一般の情意習慣、そういうものが人間形成に大変意味をもつものだという事も言っていたわけで、それらのすべてをひっくるめて、衆心発達という事を大事にしていかなければならないと、こういうふうに言っていた時期の福沢の見解は、やはり時流を抜いた卓見であったと思います。

しかし、だんだん時代が推移していきますと、その所説に微妙な変化が出てまいります。結論的に申しあげますと、産業立国への熱望というものが、福沢の中に或る微妙な変化を起すわけで、何とかして日本をしっかりとした資本主義国にしかも早急に仕立て上げていかなければならない。そうしないと国の独立が危ぶまれるという産業立国への熱望が一方にあつて、その裏返しとして産業立国を妨げる恐れのある、彼が言う所謂「貧にして智あるもの」「貧智者への恐れ」というものが、だんだん強まって出てくる。貧智者への恐れというのは、明治二三年の「貧富智愚の説」という論文の中によく示されております。やがてはわが国にも職工の同盟罷工というような問題が起こるであろう、或いは社会党や、虚無党が出現してくるのではないか。彼はそういう心配を披れきしています。

それからまた、明治二四年「封建の残夢未だ醒めず」では、「共產主義の類一度社会に現出し、少年血気の輩唱

和すれば社会の混乱推して知るべし」と、こういうかなり強い語気で社会主義運動、共産主義者の出現を予測して、これを警戒しなければならぬというようになるわけでして、とにかく「貧にして智あるもの」をいかにして防ぐかという事が、福沢の大きな関心事になって参ります。その具体策としては有名な、明治二十四年の「貧富論」があります。ここでは福沢は具体的な提言をいたします。一つには宗教による貧民教化という事をうちだす。これは「学問のすすめ」とか「文明論の概略」とか、あの時期の福沢からは考えられないような発想です。福沢は、生涯にわたって宗教というようなものとは無縁であつたわけですし、寧ろ馬鹿にしておつたのではないかと思われますが、その福沢がいまや宗教というものを再評価する。それは貧民の思想が激化しない様にするためには、宗教ほどいいものはないという考えであつたのだらうと思います。宗教による貧民の教化という事の次には、教育の過度を防ぐということ、つまり、貧者の教育を高尚に過ぐる事無からしむるの意味なりとこう言つて、かつては「学問のすすめ」で、あれほど学問をする事は大事であると説いた福沢が、教育はあまり過ぎてはいけない、特に貧乏人の教育をあまり程度を高くしてしまふと、これは危ないところというふうに言います。また貧乏人を慰撫するために所謂公益慈善事業を起こせと言います。さらには積極的に人民の海外移住をすすめる。そして、この「貧富論」の最後は彼の祈りにも似た言葉が書き付けられます。「今に於て早く謀を為さんこと吾輩の呉々も祈る所なり」。

たとえばこういう福沢の考え方は、何らかの形で先ほどの山名に反映したのではないかというふうに思われます。が、今日のところでは想像の域を出ません。要約しますと、我が国の社会教育思想のもととの考え方というのは、以上見ましたような形の労働運動、社会運動対策、或いは社会主義、共産主義を防ぐための民衆に対する啓蒙教化、こういう社会政策的な発想が著しく強いものであつたということです。

始めに申しあげましたが、それを一つの座標軸に据えておきまして、それとの距離と言いますか関わりに於て円了

の社会教育のとらえ方を次に見てみたいと思います。といひましても、先ほど申しあげました様に、僅かなものしか読んでいないのですから、大変あいまいな事しか申しあげられませんが、講演集の中の「地方教育上の実際」に定義と見てよいのではないかと思われる言葉がございます。この「地方教育上の実際」の中で彼は、家庭教育だけでは教育というものは十分ではないというんですね。つまり、第三の教育として、言わば社会教育とでもいふべきものがあるのではないかという言い方をした後で、その社会教育について、こう言うのです。「社会一般の風俗習慣、或いは朋友間の交際として得る所の感化」、そういうものが大事だといひまして、社会に於てどう教育するかという事は、ほとんど誰も心においていない、それが今日の教育の欠陥の一番大きなものだと思ひます。ここに円了の社会教育に對するとらえ方の中心といひましようか、基本的なものと見てよいのではないかと思ひます。

つぎに社会教育の目的ですけれども、これも社会教育の目的という明確な文章があるわけではありませんから、いくつものものをつぎはぎして推定するという方法による以外に、ありません。講話集に「日本人の特質」といふのと、「修身教会設立旨趣」といふのがありまして、その二つから円了が社会教育の目的をどう考えたかという事を推定する事ができないかと思ひています。で、円了がどう考えていたかという事を申しあげますと、一つは日本人の改造という事、それからもう一つは、国勢民力の強大化、このあたりに目的が設定されていたのではなからうかと思ひます。

「日本人の特質」の中で円了は日本や日本人の短所というものを、かなりこつぴどい言い方で指摘します。日本人というのは人体は小にして短、性質は小にして急なりとこういふうに言うわけで、現代では軽小短薄というのが良いのだそうですけれども、円了先生はちょうど逆なんです。狭小短急薄弱というのはなさない。わが国で西洋に較べて大きい物は風呂桶と奈良の大仏ぐらいの物である、と云つて嘆くわけです。ですからこれを改変するのが目下の

急務であると言ひまして、何故日本人が輕小短薄になつたのか、過去のことは仕方がないが、将来に向つてなんとか改めなければならない。そこで、学校教育だけでは間にあわないので、学校教育の他に種々の方法を設けて、世界的思想、宇宙的觀念を注入し忠君愛國の氣象のうちに包含せしめなければならないと、大變氣宇壮大なことを言ひます。

そのためにはどうするかという方法の問題になりますが、今の「日本人の特質」の中で、方法についてもかなり具體的に触れております。これはいくつかに分けられておりますけれども、一つ學問上で言うと、世界地理、世界史、それから天文、哲學かういふ學問が日本人の輕小短薄を打ち破るのに大變有効である、かういふもので遠大の思想を養うのでなければならないと言ひます。そしてその次に芸術の改良という事を言うんですね。つまり音楽や繪画が人間形成に大事な役割を持つてゐるという事を認めたうえで、しかし今ある日本の音楽や繪画は、やっぱり先ほど言ひました様な狭小短薄に属するわけですから、何とかこれを変えていかなければならない、變えた上でその芸術というものもまた日本人の改造に使う事ができるとかういふふうに言ひます。三番目には日夜接觸してゐるもの、つまり日常性の中の様々な目に触れ体に触るものを注意深く改良していかなければいけないのです。たとえば部屋の中に、地球儀を置くようにしたらどうか、そうすると四六時中世界という觀念が湧くのではないかと言ひますし、それから世界地図を掛けろと言うんですね。また、部屋の中の色々の飾り物についても、日本人好みの万事夢の如しというふうな軸であるとか、富貴は我が願うところにあらずというような軸はよろしくない。そういう物はみんな變えて万事は夢にあらずという軸を掛けた方がよろしい、富貴は我が願うところなりという様な掛け軸に變えた方がよろしいと言つてゐる訳で、なかなか芸が細かい。更にはまた日本人の改造というようなことは一朝一夕で出来る事ではないので、遠大な目的を掲げておかなければならないと言ひます。その日本人改造のための遠大な目的として四了が述

べているのは、「他日日本をして、東洋の風雲を排して平和を維持するには、余が所謂遠大の志望、遠大の知慮を要す。」東洋の平和を実現していくという遠大な目標を前面に掲げておいて、そのために日本を改良していくのだという、そういう手続がいるのではないかと思います。

もう一つの「修身教会設立旨趣」、こちらの方にも社会教育の目的や方法に触れていると見られる言葉がございいます。前のは若干ニュアンスが違ってくるのですが、これは、前年の欧米視察の結果、諸外国の状況やそれとの関係でわが国の現状というものについて、一層リアルな目を持ったというような事が、或いは反映しているのかも分かりませんけれども、社会教育の目的として、国勢民力の強大化という言葉を使っています。円了には、町村一般の風俗、習慣の改良が国家全体の改良に通ずるという考えがあったと見てよいと思います。ところが、ここではその方法としては、修身教育の充実という問題これ一本に絞ってしまうのです。最初の方は、先ほどお聞きいただきました様に、学問の力に依拠しなければならない、芸術も用いていかなければならない、日常生活の様々なものも改良していかなければならない、さらにはまた遠大な目標を掲げておかなければならないと、こういうふうに相当きめ細かく方法についての発言があったわけですが、この「修身教会設立旨趣」ではそこがぼっそり切られまして、専ら、修身教育という方法によって国勢民力を強大化し、町村一般の風俗、習慣を改新していくということになってしまふ。先ほどの「日本人の特質」と比べると、方法に関する発言と言いますか中身が明らかに貧弱になっている。

ですけれどもここで円了が言っている道徳教育のとらえ方というのは、よくよく読んでみますと、必ずしも偏狭なものではないと言えはしないかと思うのです。ここで必ずしも偏狭なものではないというのは、やはり比較の上でそういうふうに申しあげるわけですが、たとえばここに同時代人の井上哲次郎というご承知の人物がおります。教育勅語のいわば公認解説者であったわけですが、その井上哲次郎の道徳観と比べてみるというのが一つの方

法ではないかと思うのです。井上は忠孝という日本道徳の一番中心のものについてどういうふうに言うかというところ、「忠は孝の内容であり、孝は忠の段階である」と、こういう言い方をする。片一方は内容で、片一方は段階、ステツプなんだと、こうなりますと忠孝というのは二つの道徳ではない事になる。井上はそうだと言います。忠孝というのは一本である、その忠孝一本という道徳こそが、国民道徳の粹である、エッセンスである、それは我が国にしか無い道徳なのだとこういうふうに説いていくわけで、つまり忠孝という道徳を以上の様な論理によって、特殊化していくわけです。

これに対して円了は忠孝をどう見るかというところ、そういう様な忠孝の特殊化に、同じ井上ですけれども円了さんの方はかなり批判的です。今は、忠というのを戦時の忠として説く事がどうも多いというふうに言いますし、それから孝も、通常の孝ではない、どうも極端な孝が説かれているのではないかと、こういうかなりさめた見方をしております。

そしてその忠孝というのは、結局、身を修め家を齊え社会、国家を富強ならしむるという事だと、そうすると忠孝の中には、儉約、勉強、忍耐、誠実、博愛、自由こういう色々な徳がみなその中に含まれてくると、こういうふうに述べてその上で、そういう徳の実行は我が国は、西欧に比べて遥かに及ばないと言うのです。ですからここで比べてみますと、哲次郎の方は忠孝というものを特殊化していくという方向性を持って説くのに対して、円了の方は今みましたように、哲次郎に比べれば一般化、或いは普遍化の視点に立って見ようとする。そしてわが国の国民は西洋の国民に比べて、遥かに及ばないのだと言うわけですから、先ほど申しました様に、円了の場合の忠孝という道徳の捉え方は、極端に偏狭なものではなかったと言つて良いのではないかと思います。

ここで第一の問題の結論として申しあげますと、わが国の社会教育のもともとの発想は社会政策的であると申しあ

げましたけれども、それとの対比で言う、円了のそれはかなり教育的だと言って良いのではないかと思います。もちろんそれは相対的な意味あいであって、両者の根底には国家の保全であるとか、強大化を願うナショナリズムがある事は言うまでもない事です。ただ円了のナショナリズムというのはこれまた極端に国権伸張的なものではなかったのではなからうかと、思っています。たとえば先ほどの「日本人の特質」の中でも、アジアの平和というものを遠大な目標にしていかなければならないという言い方をしているわけです。ただナショナリズムの問題というのは非常に厄介な問題で、僅かな講演、その他で断定的な言い方はもちろん避けなければなりません。これが実に厄介な問題だというのは、例えば福沢のような相対主義者といえますか、所謂醒めた目を持ったリアリストにして、なおご承知の脱亜論のようなナショナリズムに激発された様な論文があるわけですね。支那、朝鮮に接するの法も隣国なるが故にとて、特別の会釈に及ばず、正に西洋人がこれに接するのふうに従って処分すべきのみ、という激しい言い方をしますし、違うところだったと思えますけれども、アジアの分取り合戦に於て遅れをとるべからず、というふうな言い方も確か福沢はしたはずです。ナショナリズムという情念が、いかに理不尽なものになるという、ひとつの例だと思えます。しかし、だからといって、ナショナリズムをただちに悪と断定して否定し去ってよいのか。少くとも、侵略的な意図に支えられた国権的ナショナリズムと、大衆の自然な祖国愛に発する素朴な大衆的ナショナリズムとは區別してとらえる必要があると思います。日本の近代の歴史的経過で言えば、国権的ナショナリズムが大衆的ナショナリズムを吸収していく、そしてウルトラ化していくという経過はあったわけですが、それにもかかわらずやはり国権的ナショナリズムと大衆的ナショナリズムは、質が違ふものとして見ていく必要があるのではなからうか、そして私は、円了はどちらかというとその大衆的ナショナリズムに近い位置を占めていたのではなからうかと思えます。

推測ついでに申しあげますと、円了も属した政教社の立場はそういうナショナリズムだったのではないか。三宅雪

嶺の「眞善美日本人」にしましても、彼は国粹主義者ですから、日本の美しい物、善い物、正しい物をあげてこれを大事にしていかなければならないというわけですが、同時に雪嶺は「偽醜惡日本人」というもう一つの論文を書いて眞善美日本人というその視点を相対化しているわけで、決して極端に国粹的ではありません。

二

今わが国社会教育思想の元発想というものを座標軸として、それとの関わりで円了の社会教育思想の特徴をどうおさえるかという事について、本当に一つの試論を聞いていただきました。次に戦前の社会教育の実践上の特徴というものを幾つか抜き出してきて、それとの比較で円了の社会教育、実践の特徴を問題にするというやり方で話を続けさせていただきます。我が国の戦前の社会教育の特徴として第一にあげなければならないのは、上から教化していくという、啓蒙教化性というものが著しく強かったということ、まず第一の特徴をそこに求めているのではないかと思います。その啓蒙ですけれども、一般に伝来の權威や、偏見や或いは俗信からの思想の解放を啓蒙と言うのだと思うのです。つまり啓蒙活動というのは、啓蒙の対象への主としての知的説得というものを手段とすると見て良いと思うのですけれども、教化は知的説得よりも、言わば情動に働きかけるということ、そしてその情動ごと丸ごと人間を支配していくという傾向を持っているのではないか。啓蒙と教化とはそこが違うのではないかと思います。そこであらためて言いなおせば、わが国の社会教育は啓蒙というよりもむしろ教化というものに偏っていた。説得というよりも専ら情動の支配というところに傾いていたと思います。そういう傾向は明治から年を追ってだんだん強められていて、遂に社会教育というのは教化一本、啓蒙はどこかに飛んでしまつて、教化運動が即社会教育というふうになつていくわけです。戦前社会教育の本質あるいは実践上の特徴を、知的側面というのが大変弱くて、情動に依拠する教化

運動になっていったと一般化した訳ですけれども、それとの対比で言いますと、円了の方には知的側面への働きかけがずっとあつたように思います。少くとも知的側面を軽視していないと申し上げていいのではないか。これも幾つかの根拠でそう申し上げるわけですが、例えば『仏教活論序論』のなかで、円了は自分の立場からするならば護国よりもむしろ愛理を先行するというような言い方をする時期もあるほどで、この時期円了は主知主義的な立場に立っていたと言っているのではないかと思います。それから、なによりも先程見ました「日本人の特質」の中で、学問や芸術の力に依拠して日本および日本人の改良を説いているわけですが、そこにも知的あるいは知的説得というものを重ねた円了の面目があると思います。ただやはり、円了も時代の子で、外遊後にはやはりヨーロッパの状況を見ておりますから、最初は護国よりも愛理を先行すると言ったんですが、これは変わってくる。護国が優先というふうになってくる。そうすると道徳教育がずっと前面に出てくる。護国のための道徳教育というようにこちらがずっと前面に出てくるのですけれども、なおかつその道徳は井上哲次郎が言うような特殊化されて世界には通用しないものじゃなくて、もう少し普遍化され一般化された形でとらえ直そうとするような、やはり知的な側面というのがあつたと思います。

それから、修身教会の活動も単に修身教育を徹底して行うというだけじゃなくて、そこで音楽や唱歌による情操の純化というのが非常に大事だと言っているのです。それからまた修身教会の活動のなかで単に僧侶や教師が一方的にお説教するというのはなくて、その活動を通して逆に僧侶自身が勉強していかなくてはならないし、ダメな坊主は脱落していくというふうに、いわば教育の相互性というものにやはり目が届いている。

例えば、「一たび教会を設置したる上は町村自然の制裁によりて僧侶の淘汰おのずから行はるるに至るべし」と言います。要するに彼らが修身教会で説教をやっていくとダメな奴はボロが出てしまつて自然淘汰されるんだと、こう

いうふうに見て、決して教育、ここでの道徳教育を一方通行的に見ていないわけで、例えばそういうことも、やはり知的側面というものを円了が少くとも軽視しないという立場を保持し続けていたということのあらわれと見てよいのではないかと思います。そこで、戦前の社会教育の特質である知的側面を軽視して専ら情動に依拠するというのとは比しているならば、円了の場合は知的なものの価値を認めながら情操教育をこれに加味したと、こう言っているのではない。戦前の社会教育で音楽を大事にするというのはめずらしい。円了は、音楽それも西洋音楽がいいと言っているわけで、情操教育の価値を、かなり理解しておったと言えるのではないかと思います。

少し急ぎますけれども、二番目のわが国社会教育の特徴は、団体中心性、団体に依拠する社会教育というところに求められるといわれております。戦前の社会教育は明治三〇年代後半あたりから本格化していくのですが、山名や福沢が予言したように労働運動、社会運動は既に活発になっております。これに対するイデオロギー対策というのがどうしてもなくてはならない。日露戦争後の地方財政の窮乏化という問題もありますし、それが風俗の悪化をもたらすわけで、したがって地方対策としての地方自治の問題、あるいは地方改良運動というものが必要になってくる。こうして労働運動、社会運動に対するイデオロギー対策と地方改良運動という二つの仕事が社会教育というものに政府の目を向けさせていくことになるわけです。その場合に財政の貧困という問題もからんで、専ら団体に依拠するという方法によることになります。この上からの社会教育には大きく分れば二つの系列がありまして、一つは内務省系列のもので、町村是をつくらせるとか、あるいは神社合併をやっていくことのほかに、報徳会を組織させて、この報徳会に依拠して地方改良運動を進めていくということ、あるいはイデオロギー対策を専ら青年団にひもをつけるという形でやっていく。文部省もそうでして、青年団、婦人会に訓令を出してこれが勝手に一人歩きをしないように監視していった、ついには上手に体制内化していく。文部省は軍国主義と思想善導という二つの線で常に監視を怠ら

なかったわけで、いずれも団体中心性という特徴が認められます。

それに対比して言いますと円了の場合は施設中心と言っているんじゃないか。例えばさきつから出ております修身教会、これを各郡、各小都會の寺院に設けるのが一番いいと言っております、施設をまず構想するわけですね。それから寺には図書館を設置して、新聞、雑誌の閲読の便を与えよと、図書館というものを大変高く評価している。これはこの時期の思想家としては卓見だと思えます。極く初期には、例の西欧をずっと巡航してきた使節団が帰ってきた直後には図書館、博物館ということを盛んに言っておりますけども、後はずっと消えてしまふ。そして、専ら団体中心というふうになっていったと思うんですけども、円了はもう一度これをよみがえらせるといいますか、「西洋は村落にいたるまで大抵図書館の設けあらざるはなし、見聞を広くし知識を進むること多し」と言って図書館をつくれと言います。それからもうひとつは簡易中学の設立ということもかなり熱心に力をいれて説いています。これは、小学と中学の間に一種の学校を設け、これを変則中学あるいは簡易中学というふうに呼んだらどうかというのです。これは正規の学校ではないので、寺院によるのも可なりとこういつて、小学校を終えて働いている農村の青年が、農閑期であるとか夏場の夜間であるとか、そういう余暇を利用して変則中学で勉強するように考えていたらどうかと言っているわけで、こういうところに団体よりも施設というものを大事にして、社会教育を構想していくという円了の特徴が出ていると思います。

三番目に戦前の社会教育はイデオロギー対策あるいは国民統合の重要な手段であったわけですから、したがってそれは当然国家が主体となつて行う事業のひとつであつたわけで官府性が大変強い。これに対して、円了は民間の力によるという考えを、これは生涯を通じて持ちつづけていたと言つてよいんじゃないかと思います。例えば先程の修身教会にしましても、これは各町村の人民の協議によりて設立しその団体の自治によりて管理しその地方の状況に応じ

て組織すべしと、言っています。決して上からの力でこれを設けるといふ発想じゃない。それは町民の自治によつて運営していくものであるから例えば東京に本部を置いて統轄するといふ必要もないと言ふのですが、相互情報交換の必要があるので修身教会雑誌といふものを発行するのだと言つていて、これは筋が一貫していると思います。

それからまた先程の交則中学、簡易中学といふ考え方ですけれども、民間の教育を盛んにしていかなければならないといふ考えが円了にはずっとあつたやうで、それを哲学館がやつていくんだといふ自覚といひますか、抱負があつたやうに思います。彼の言葉をまた引きますと、民力相応の簡易中学のような私立中学校を設立して、一はもつて独立の精神を開発し一はもつて着実な人物を養成すと、こういうのです。官立の学校、例えば帝国大学は國家に須要な學を攻究せしめるといふやうに、帝國大學令の目的規定のなかに言つておりますけれども、円了の場合は民間に獨立の精神といふものを開發していくんだといふわけで、それに、哲學館を結びつけていく。哲學館卒業生に地方適宜の地にこの性格の學校を設立監督せしめ、數年間實習したる學科を廣く民間に應用せんことを奨励せんとすところ言つています。哲學館卒業生が廣く民間でその力を發揮することを願うといふ、彼の考え方といひますか、發想があらためて思ひ起されてよいと思います。

もうひとつ余計なことを申し上げますが、円了はアジアといふものを視野にいれて、アジアの發展に役立つ人材を哲學館、東洋大學でつくつていくのだと考えていたのではありませんか。先程大衆ナショナリズムと言ひましたけれども、侵略的ナショナリズムではない健全な意味でのアジア主義とでも言うべき發想があつたんじゃないかと思ひます。例えば「哲學館學科改正につきて」を読んでおりましたら、「意ふに將來わが邦人の働くべき場所はアメリカと支那朝鮮なり」と言つてます。「故に教育部および哲學部の第一科は英語を主として、これに加ふるに英語の會話、作文等實用に適切なるものを授け、他日アメリカに入りて生計を立つるの準備をなし、つぎに第二科は漢文を主とし

これに時文官話を交へ、他日支那、朝鮮に渡りて職業につくの便利を与へんとす」とこう言つて卒業生がアメリカ、中国、朝鮮に渡つて職業につく、そこで一人前の市民として働くという、そういう哲学館の卒業生の将来を述べているわけです。どこにも侵略的な語気はありません。それで健全なアジア主義といったのですが、これは私の思いつきにすぎないかもしれません。御検討を願います。

続けますが、その民間性というものを円了がどれだけ徹底して考えていたかということになりますと、私が読んだ僅かなものではとても分かりません。民間性というものを徹底して考えていきますとどうしても活動の担い手としての民衆という問題が出てこなければならぬ。教育の客体としての民衆ではなくて教育の主体としての民衆、そういうものがいずれば出てこなければならないと思うんですけれども、この問題に関して円了がどう考えていたのかということはよくわかりません。しかし修身教会を各町村の人民の協議によつて設立すと言っているわけですから、かなり民衆に対して積極的な位置づけを与えようとしていたというふうに見えるわけですが、しかし同時に円了のことばづかいには、愚民賤民というのがあつてそこを切つてしまふような言い方があるわけですから、これをどう見ていくかということですね。なにしろ仏教には例の仏教的弁証法ともいふべき言い方があつて、差別即平等ということとを言うもんですから、その論理にしたがえば愚民即智者ということにもなるわけでしょうから、円了が果して本当に一部の民衆というものを愚民賤民として切つて捨てていたのか、決してそうではなかったのかということは、今のところ私にはわかりません。社会教育の問題というのは、結局は国民の自己教育あるいは相互教育という形で主体形成の問題に帰着するわけですから、したがつて主体の問題をどういうふうにとらえていたかということは、実は最終の一番大事な問題になってくるのですけれども、残念ながらそこところは私の俄か勉強で読んだところではあいまいでして、これについては、もう少し資料を読みながらこれから勉強していかなくてはと思つております。